

空を見上げる

ぱくきよんみ

山村暮鳥は、雲に託した詩をいくつも書いている。

これは、「ある時」という詩。

雲もまた自分のやうだ

自分のやうに

すつかり途方にくれてゐるのだ

あまりにあまりにひろすぎる

涯のない蒼空なので

おう老子よ

こんなときだ

にここにこととして

ひよつこりとでてきませんか

『雲』（暮鳥歿後、出版。一九二五年）より

※

カレは、歩んだ人生が過酷だったから、空を見上げた。

カレは、結核まで患い、胸苦しくて、空を見上げた。

カレは、そうだろう、世の中を憂いて、空を見上げた。

一九二〇年代、このクニが軋むことに絶望して、空を見上げた。

その空のつながりにカレやカノジョの連なりを想う、五〇年経っても一〇

○年経っても、変わらない、憂う地上があるので。

✽

空を見上げると、いつのまにか雲の行方を追ってしまふ。

いま、広がる、空が、遙かな昔から、ずっとそうあったことに気づいて心ふるえる。

雲、雨、みぞれ、霧、雪・・・空の気象を、実感とともに体内に織りなして、わたしたちは暮らしている。都会育ちでも、ビルの谷間の空の切れ端を眺めてきた。大粒の雨にからだを濡らしたこともある。けれど、白いちめんに染め抜かれた雪景色に心身がのみこまれた状態になったのは、別次元の経験だった。それは、カナダの西部、バンフという町で過ごしたときの雪景色。

二〇一九年一月二七日、雪降る加賀市を訪ねたとき、その景色をからだの奥で重ねたので、詩「雪の掌に」を発表しておこう。この詩をつくった背景について書いたものも添えた。

✽

雪の掌に

ぱくきよんみ

凍り道で

差し伸べられた手は強く

足もとの覚つかないわたしを引っ張り

だからわたしは迷ってもいられなかった

道際に引き寄せられることに

そのひとの胸に引き寄せられることに

雪の手たちが

すばやくマツボックリを拾う

黄枯茶の、その色がころがっていたから

葡萄色の、その色がにじんでいたから

朽葉の、その名残、

それはかすかに音を立てているものだろうか

いちめんの白、くぐもる気配、

それはこんなにも迫りくる重みなのだろうか

墨も混ぜて

雲もちぎれて

淡いマゼンダも溶かして

そんな夕闇を背にしよいこんで

わたしはけんめいに足を踏み出す

位置を、場所を、探す

薄い空気の一片が

鼻先でむずかるので

指という指を

手袋やポケットから取り出さなくては、ね

まつわる冷たさは心地よく

わたしにふれた、雪の掌に

あの名残の色を置こうか

それとも

このまま人肌の温もりを伝えたままに、

しておこうか

この数年のうちに、海外の国際的な詩祭に続けて参加した。アメリカ合衆国東部のニューヨーク、イタリアの港町ジェノヴァ、マケドニアの古都ストゥルガ、ラトヴィアの首都リーガ、と飛んだ。さまざまな人の縁に繋げてもらえた、結果のことだった。「それはまたどうして？」と質す方々の目には羨望の色が滲む。「わたしも行きたいもんだ！ わたしも詩を書いているぞ！」と某造形作家。もちろん、降って湧いたような外国行きを羨む視線をはね返しつつ、わたし自身、詩祭への参加に胸躍ったものだけれど、一呼吸のちには「わたしはいったい何語で読むのか？」と、こめかみの辺りで発話が混乱するのだった。

詩は母語で読む——詩を書く者自身がそのあたり前の感覚をこうして揺らさせられるのは、いったいどういう意識が働くからだろう・・・つまり外国の耳に通じない母語で詩を朗読して聴衆に届くものはなんだろうか、という不安も広がるのだ。この混乱と不安は回を重ねるごとに輪郭を強くさせてきたが、解決の糸が見つかるわけもなく、わたしは外国の聴衆を前にして、日本語で詩を読んできた。

今夏のラトヴィア行きは二年間、先方の担当者とメールによるやりとりをして実現した。共通語は英語なので、パソコンに向かいながら、ときには先方の意図を理解し、答えるのが面倒でストレスの固まりとなった。それでも少しづつ、詩祭の実現が見えてきたころ、先方より朗読する詩をラトヴィア語に翻訳したい、よい翻訳者を確保したのだ、というメールが舞いこんだ。パソコンの人工的な光のなかで、そのメールは違う光をまとうていた。素晴らしい、と思った。イタリアでもマケドニアでも、英語に訳された詩からおのおのの言語に訳されてきて、わたしの混乱も不安も相談する機会はなかった。

わたしはラトヴィアからの朗報にじんわりとした感動を味わいながら、しづかに思い出しはじめた。「雪の掌」がまた差し伸べられたのだ、と。

そう、詩「雪の掌に」は遠い雪の土地で書いた。九〇年代の終わりに連れ合いの造形作家とともに滞在したカナダ西側の山間部バンフで。晩秋にはすでに一帯が積雪でおおわれていた。アーティスト・イン・レジデンスのプログラムで滞在していたので、宿泊の寮と、食堂、スタジオを往来する毎日だった。時おり谷の町まで買い物に行ったのだが、山をおりて登ることの難儀なことといったら！ 町育ちのわたしはひよわだった。雪道を必死で歩きながら見上げた雪景色はただ美しく、めまいを覚えた。雪の中で出会うへら鹿たちの匂いも強烈で、めまいを覚えた。何重ものめまいに、とり囲まれていった。めまいをよび寄せる狂いが雪の静寂のなかに忍んでいた。その忍び寄るものに、わたしはほんとうに畏れを抱いた。でも歩き出そうと決めた。なんども転んだけれど、そのたびに掌が差し出され、わたしは立ち上がることでできた。「雪の掌(てのひら)」と名付けたのは、矢川澄子訳のポール・ギャリコ『雪のひとひら』を読んでほらはら流した泪がまだ胸の内にたまっていたからだろう。

詩「雪の掌に」は「草月」第二四八号（二〇〇〇年）初出。

その後、付記を加筆して、ちいさい文芸誌『eta』「冬号」（二〇一〇年）掲載。